

## 江戸湾をつなぐ梯

### ～品川浦舟溜まりを対象とした水上交通拠点の設計と水辺から波及するまちづくりの計画提案～

都市空間生成研究室

2041142

藤田 祐基

水辺空間	水上交通拠点	舟運
都市デザイン	まちづくり	品川浦舟溜まり

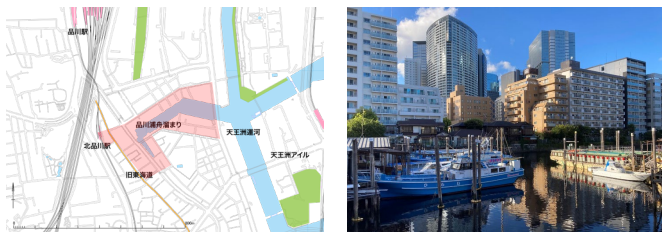
#### 1. 研究の背景と目的

世界中の多くの都市は舟運を活かした交易や運輸の拠点として、水辺で発展を遂げた。世界有数の都市である東京も、近世までに舟運を軸に都市を成立させ、江戸時代には都市の重要な施設や場所は舟運と結びつき、その多くは水辺に立地した。江戸の水辺は活気に溢れていた。

しかし、明治時代以降、近代化の影響で水質の悪化や埋め立てが進み、交通や物流の手段も陸へと変わっていった。その結果、舟運が廃れ、人々の気持ちは水辺から消え、建物も水に背を向け、水辺の価値は失われていった。

近年では水質の改善などもみられ、水辺を活かした親水空間の整備や再生が注目されるようになったが、一度孤立した水辺空間は、かつての歴史や環境を鑑みず、孤立したまま再生し、陸側の都市空間との結びつきは弱いのが現状である。また、公共交通機関として舟運を推進していくにあたり、今後は水辺における TOD (Transit Oriented Development) といった考え方が必要である。

そこで本研究は、親水空間の整備や舟運の活性化など、東京の水辺空間の更なる可能性を示すことを目的に、東京都品川区東品川に位置する品川浦舟溜まりとその周辺地区を対象とし、水辺空間を活かした水上交通拠点の設計と都市空間への接続を計画立案する。



右：図 1. 計画対象地（図中で示すのは設計範囲）

左：品川浦舟溜まり

#### 2. 品川浦舟溜まりとその周辺の歴史

##### 2-1. 品川浦とその周辺の歴史

品川浦は古代から江戸時代にかけて舟運や漁業によって周辺のまちを活性化させ、寺社なども多く創建された。江戸時代には東海道の第一の宿場として品川宿が定められ、賑わいに溢れていた。近代化によって、品川浦にお

ける舟運や漁業が衰退したが、埋立地をはじめとする周辺部は自動車や鉄道による陸運の発達により、都市開発が進んだ。舟運においても、陸運においても、品川浦とその周辺は非常に重要な場所であったことが整理できた。

##### 2-2. 江戸時代の水辺空間と都市空間

江戸時代の様子が描かれた史料をみると、船着場や雁木、広場が存在し、舟運による人々、物資の往来が水辺に活気を生んでいたことがわかる。そして、水辺空間と都市空間をつなぐ道（横丁）が多く存在していた。これらの要素は、かつての水辺の賑わいを取り戻す上で非常に重要であり、ここから本研究の計画の着想を得る。

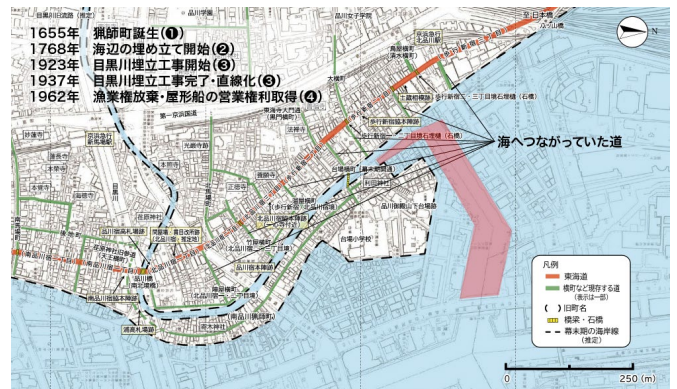


図 2. 品川浦舟溜まりの形成と海へつながっていた道<sup>\*1</sup>

#### 3. 品川浦舟溜まりを取り巻く現況

品川浦舟溜まりの周辺は、旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会によりまちづくり活動が行われている。また、区は品川浦舟溜まりが位置する品川地区において、まちづくり方針を定めている。さらに、品川浦・天王洲地区として、運河ルネサンス指定地区になっている。

#### 4. 舟運と水辺

##### 4-1. 舟運の実態

東京都は、2023 年に日本橋～豊洲間の舟運通勤を開始した。しかし、運行本数は少なく、今後舟運を活性化させるには、より多くの航路の運用や運航日、運行本数の増加運賃の値下げなどが必要になるだろう。また、2023 年 10 月に開催された「しながわ水辺の観光フェスタ」の

目黒川クルーズにて、舟運の可能性を探るための調査を実施した。結果、本研究の計画において、水上交通拠点と鉄道駅の接続が重要であることや舟運ルートにおける目的地までの運行時間の基準が明らかになった。

#### 4-2. 水辺の実態

品川浦舟溜まりはフェンスに囲まれ、水辺へアクセスすることができない。周辺も良好な環境とは言えない。さらに、近隣の都営アパートは老朽化が進んでいる。一方で運河ルネサンスの取り組みが推進されている。天王洲アイルの水辺では、水上レストランや水上ホテルなどが立地し、歩行デッキには人々の活動がみられる。さらに他運河ルネサンス指定地域との連携を図れば、東京の水辺の更なる発展につながる。孤立した水辺、悪化した水環境などの課題を解決する必要がある。

#### 5. 計画案

本研究の計画コンセプトは「梯（かけはし）」とした。品川浦舟溜まりとその周辺において「水辺空間と都市空間」「人と人」「まちとまち」といった様々な要素をつなぐ「梯」となる。コンセプトに基づき、水上交通拠点の設計と水辺から波及するまちづくりの計画を行った。

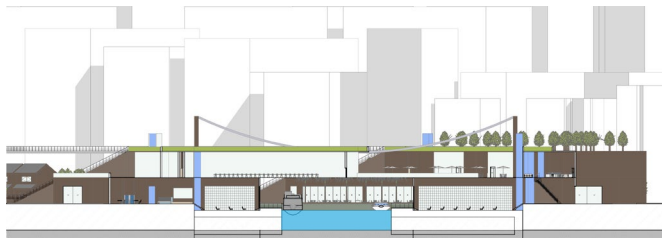


図 3. A-A' 断面図

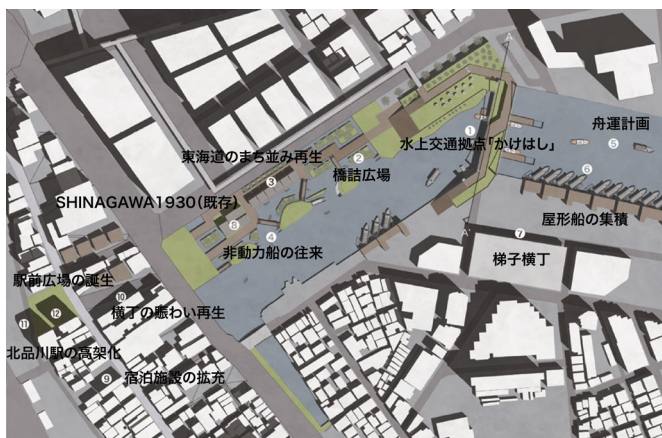


図 4. 敷地配置図

屋上を含む3フロアからなる水上交通拠点「かけはし」は、品川浦に架かる橋のような建築デザインで、橋詰広場を生む。水上交通拠点「かけはし」は、東京舟運の拠点となり、東京湾沿いの都市を結ぶ。また、訪れるオフ

イスワーカーのためのコワーキングスペースや、観光客や地元の人でも利用できるレストラン・カフェも有している。橋詰広場は高い親水性を持ち、水辺と人々を近づける。また、東海道のまち並みを再生し、品川宿とのかかわりを示す。梯子横丁は品川駅と接続した水上交通拠点「かけはし」を経由し、仕事終わりの人々で賑わう。また、屋形船を集積させ、非動力船との共存を可能にした。水上交通拠点「かけはし」による水辺の賑わいから波及するまちづくりとして、宿泊施設の拡充や横丁の賑わい再生によって旧東海道品川宿のまちに活気をもたらす。



左：図 5. 全体パース

右：図 6. 橋詰広場の賑わい



左：図 7. 水上交通拠点「かけはし」

右：図 8. コワーキングスペース

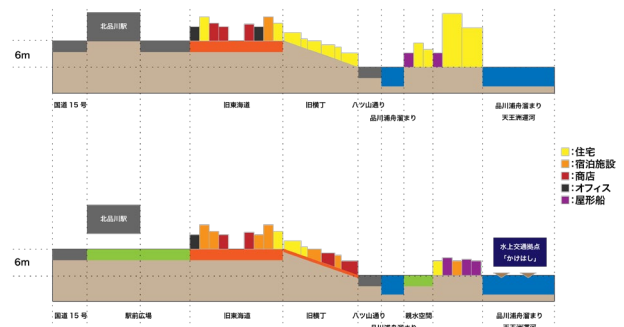


図 9. 水辺から波及するまちづくりダイアグラム

注

1) 出典：品川区立品川歴史館、「東海道品川宿マップ」、2021年

参考文献

- 1) 三井住友トラスト不動産、「写真でひもとく街のなりたち 東京都品川・荏原 江戸期の品川周辺」  
<https://smtrc.jp/town-archives/city/shinagawa/p02.html> (最終閲覧日：2024年1月19日)
- 2) 品川区 都市環境部 都市計画課、「品川区まちづくりマスタープラン」、品川区、2023年
- 3) 末吉恵他(2009)「旧宿場町の歴史資源を活かしたまちづくりの構造とその地域性-品川宿と千住宿の比較研究-」、『観光学科研究』、第2号、pp65-84、首都大学東京大学院都市環境科学研究科地理環境科学専攻観光学専修
- 4) 東京船旅、「TRY！舟旅通勤」、<https://www.suitown.jp/cruise/234/> (最終閲覧日：2024年1月22日)